

## ブックレット 著者からのメッセージ

### 「多摩川水系・野川を歩く」

山本 佳世子

(電気通信大学大学院情報理工学研究科  
・国際社会実装センター教授)

多摩川と聞くと、多くの方々が名前を聞いたことがあるのではないのでしょうか。本書で対象とした野川は、延長 20.2 km、流域面積 69.6 km<sup>2</sup>の小規模な多摩川の支流です。国分寺崖線（はけ）に沿って、随所で湧水を集めながら、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市、世田谷区を流れ、二子玉川から多摩川に合流する都市型河川です。なお、はけ（またはハッケ、バケ、パッケ、ハゲ等）とは、一般に河岸段丘の崖線・崖面や山地の崖そのものを指し、崖上の地域や集落を含めて指すことも多くあります。また、はけとその同意語の地名は、全国各地に見られます。

野川は、上述のように、東京都内の複数の自治体にわたって流れており、見所は複数あります。鉄道やバスなどの様々な公共交通機関を用いて、野川の随所に行くことができます。野川流域の自治体で構成する「野川流域環境保全協議会」では、野川マップを各市区がそれぞれ発行し、インターネット上で公開しています。いつの季節でも、野川の両岸に沿った緑道で、ウォーキングやジョギングをする人をよく見かけます。

一方、野川は川幅が小さく、水深が浅い河川であるため、集中的な降雨により河川水位が急激に上昇することがあります。そのため、野川流域では、梅雨、台風、雷雨、集中豪雨の時に洪水がしばしば発生していました。この地域では、洪水対策として、河川改修や調節池の整備などによる河川整備がこれまで継続的に行われています。

このように、野川は、平常時は地域住民にとっても親しまれていますが、洪水発生時には地域住民にとって脅威になることもあります。また、この地域の自然環境を守るためのいくつかの市民団体が設立され、積極的に活動しています。平常時には、野川に親しむことで、自然の豊かさ、自然の恵みを楽しむとともに、災害時の状況を想像して身近なリスクについて考えることは、個人による自助の災害対策として有益であると考えられます。

近年は、地震、火山噴火などに加えて、気候変動の影響により、世界各地で豪雨災害が多発しています。わが国でも毎年のように豪雨災害が発生し、被災地では大きな被害が出ています。こうした時代だからこそ、本書を携えて野川を歩くことで、身近な河川から自然と人々との関わり合いについてぜひ考えていただきたいと思います。